



### 戦後の東京女学館における高等教育の思い出—専攻科卒業生からの聞き書き

戦禍のため生徒数が激減した戦後まもない1948（昭和23）年、本学は戦前からあった高等科を廃止しましたが、1954（昭和29）年に専攻科を創設します。そして翌年にはK館を建設し、1956（昭和31）年に短期大学文科の開設とともに、専攻科の廃止を決定します。専攻科は僅か2年間しか存在しませんでした。本学における高等教育再興への基盤となった2年間でした。日本がアメリカの占領支配の時代からようやく抜けだし、高度成長への道を歩み始めた時代でしたが、この時代に本学における高等教育は再興し、新たな展開をみせることとなったのです。

史料編纂室では昨年夏、短期大学の前身である専攻科の卒業生4名の方々からお話を伺う機会をもちました。以下にご紹介いたします。

卒業生のお話によれば、専攻科が創設されてすぐにそのまま専攻科に進学を決めたのは、当時の担任の先生から勧められてとのことでした。入学してみると、高校3年時の担任の先生がそのまま、専攻科の担任になられたとのことでした。学生は必ずしも女学館出身者ばかりではなく、自由学園など、他の高校出身の方も入ってこられたとのこと。秋には本学敷地の東南角にK館が建設され、すぐにそこに移られたということです。K館は1階が卒業式も行われた広い教室、2・3階が授業用の教室ということでした。8時半に登校、4時には下校という毎日。昼食は普段、教室で食べていたようですが、のちに学外に行くことも認められ、日赤商店街のうどん・そばのお店に入ったりしたそうです。授業は blanks がなく、先生方が高度な内容を時に厳しく、時に優しく教えてくださり、学生は遊ぶが如く学ぶといったらいいか、お習い事のように学んでいたともお話しくださいました。英文の翻訳などを宿題として課されましたが、時に兄やボーイフレンドに教えてもらったこともあるなどとお話になりました。制服はまだなく、初めてカラー付のブラウスを着ることができてうれしかったとのことでした。クラブ活動は専攻科としてはなかったものの、高校のクラブに先輩として接しておられ、記念祭や体育大会にも、共同参加で、記念祭にはクッキーなどを売っていたとのことでした。1年の夏山への旅行、2年の東北への修学旅行も懐かしい思い出とのことでした。許婚のいる学生もいて、卒業と同時に結婚されたとか。一方、卒業後、大学に進学する学生もいたとのことでした。また、すぐに就職したわけではなく、ときにアルバイトなどに就くことはあっても、多くは自宅で花嫁修業されていたわけです。当時、女性が職に就くことを家庭が望まなかったという背景があります。卒業後のクラス会は2年に1度の割合でよく集まられるとのことで、専攻科生の人数が少ないことが同窓の友情を深くしたとのことでした。最後に、カドリールのことに触れられ、現在のカドリールは外で演技するダンスになっているが、自分たちが習われたのは室内で行うカドリールであり、現在ほど動作が大きくなかったとお話され、時代を隔てて踊り続けられてこられた先輩のお気持ちの一端を知ることができました。

こうして四方山にお話を伺っていると、戦後間もない時代の風気を感じさせるものがあり、まさに、人ありて時代は蘇るの感を深くした時間でした。



K館と専攻科の授業風景

### 『東京女学館短期大学史』完成に向けて

現在、史料編纂室では大学の松本裕美先生を加えて、今年11月の刊行に向け、編集作業を急いでおります。『短期大学史』はトピックや写真を多く掲載して、まずは皆様に読ん

で載けるような読みやすいものを、と考えております。この間、専攻科・短期大学の教職員・卒業生の皆様から貴重な証言を戴いてまいりましたが、今後もそれを重ね、戦後の時代風潮を背景とした『短期大学史』の執筆を心がけたいと存じます。

## 展示紹介:『回想の東京女学館』企画展示

史料編纂室では、『回想の東京女学館』と題する企画展示を、中・高図書館入口付近の専用陳列棚で、年に2回行っています。今回は、過去に行われた2回分の展示、及び現在行われている展示について、開催した順でご紹介いたします。

### 「皇居一周と東京女学館」

(開催期間:2011年10月～2012年5月)

## 総合解説

皇居周辺には、本学と馴染みの深い場所が数多くあります。最初の校舎は、現在の千代田区永田町に置かれました。ここには第10代館長・有光次郎の手による「東京女学館発祥の地」のレリーフが据えられています。その南には衆議院議長公邸、北には江戸城の赤坂見附跡があります。

1890(明治23)年、本学は外堀に沿うように東へ移動し、虎ノ門の旧工部大学校生徒館に入りました。この時から、本学は「虎ノ門」と呼ばれるようになりました。この地には江戸城の虎御門が建てられ、守護神として白虎が配置されたそうです。現在も17世紀前半に築かれた外堀の石垣が残されています。

皇居を時計と逆に回り、北上した北の丸公園には、北白川宮能久親王の銅像が建っています。能久親王は、本学の母体である女子教育奨励会の会長でした。その近隣には、本学の関連史料も保管されている国立公文書館があります。

さらに北、九段には、本学の教員だった三輪田眞佐子が創設した三輪田学園、そして第4代館長を務めた神田乃武の住居跡があります。

このように皇居周辺には本学とゆかりのある場所が多く残されています。決して遠方ではありませんので、折を見て足を運んでみるのも一興でしょう。

## 永田町

### ◆雲州屋敷



本学の母体である「女子教育奨励会」が宮内大臣・土方久元(後の第3代館長)に永田町御用邸の借用を申請し、本学は創設されました。同邸は、出雲国(島根県)松江藩主・松平出羽守の屋敷であったこと

から「雲州屋敷」と呼ばれ、1890(明治23)年まで使用されました。その後は長く閑院宮邸でしたが、現在は衆議院議長公邸となっています。

### ◆「東京女学館発祥の地」レリーフ

1979(昭和54)年、本学の創立百周年記念事業の一環として設置されました。現在の東京都千代田区永田町2丁目18番地1号、衆議院議長公邸の北側、赤坂見附(見張りのための



施設)跡の向かいにあります。

レリーフには、次のように記されています。

東京女学館は、明治二十年この地(旧松平出羽守邸、俗に雲州屋敷、のち閑院宮邸)を皇室より貸与され、翌二十一年開校した。その後、麹町三年町(旧工部大学校)に移り、「虎ノ門女学館」と称せられた。大正十二年関東大震災のため焼失したので渋谷御料地に移り、女子の一貫教育の場として今日に至っている。ここに、往古を偲(しの)び、将来の弥栄(いやさか)を祈り、創立百周年を記念して碑を掲げる。



左:衆議院議長公邸入口

右:赤坂見附より旧赤坂プリンスホテルを望む

## 霞ヶ関～虎ノ門

### ◆虎ノ門校舎

女子教育奨励会が、欧米流の女子教育にふさわしい場として、新たに近代建築の校舎を求めたところ、1890(明治23)年、宮内省から虎の門にある「旧工部大学校」の生徒館を貸与されました。



本学は1923(大正12)年までこの地にあり、その地名から「虎ノ門」と通称されるようになりました。

### ◆「工部大学校址」碑



1939(昭和14)年、工部大学校出身者の「虎ノ門会」により建てられました。現在の東京都千代田区霞ヶ関3丁目2番地2号、文部科学省の脇にあります。

#### ◆「華族女学校遺跡碑」



衆議院議長公邸の東側入口には、華族女学校遺跡碑が建っています。

### 北の丸公園

#### ◆北白川宮能久親王銅像

「女子教育奨励会」の会長であった北白川宮能久親王の銅像は1903（明治36）年、新海竹太郎の制作で、北の丸公園内に置かれました。

北白川宮能久親王は伏見宮邦家親王の皇子で、1867（慶応3）年、上野寛永寺に入り、徳川家にとり重要な日光輪王寺門跡を継承しました。その関係から、奥羽越列藩同盟の盟主に据えられ、一時は明治新政府の反逆者として扱われました。

後に僧籍を抜き、1870～1877（明治3～10）年のプロイセン（ドイツ）留学を経て、陸軍に入ります。この間、1872（明治5）年に北白川宮家を相続しています。1895（明治28）年、日清戦争後に行われた台湾出征の際、当地でマラリアにより薨去しました。



#### ◆国立公文書館



各官庁で保管されてきた公文書を一括して保存・公開する目的で、1971（昭和46）年、総理府の附属機関として千代田区北の丸公園に開館しました。1885（明治18）年に発足した内閣文庫の資料も継承し、江戸幕府の典籍・古文書や太政官の公文書も収蔵しています。

ここには、本学による財団法人の設置、学則および寄附行為の変更に関する史料なども収蔵されています。

なお、国立公文書館の収蔵史料は、防衛省防衛研究所・外務省外交史料館の収蔵史料とあわせ、インターネット上で無料で閲覧することができます。

「国立公文書館アジア歴史資料センター」（JACAR）

<http://www.jacar.go.jp/>

### 九段

#### ◆神田乃武邸跡



明治～大正期の住所は麹町区飯田町3丁目29で、現在の千代田区富士見1丁目2番地5号です。付近には、暁星小・中・高等学校があります。

神田乃武は英語学者で、1918年より1923（大正7～12）年まで、本学の第4代館長であった人物です。

#### ◆三輪田学園



1887（明治20）年、三輪田眞佐子が神田に開いた翠松学舎がはじまりです。「誠のほかに道なし」を校訓とし、徳才兼備の女子の育成をめざしました。現在の校舎は2010（平成22）年に竣工したものです。

三輪田眞佐子は明治・大正期の教育家で、1897（明治30）年頃、本学で教鞭をとり、国語科を担当していました。

## 「東京女学館の戦後復興」

—— 澤田源一の学園経営 ——  
(開催期間：2012年5月～2012年11月)

### 総合解説

戦後、東京女学館は学園経営の危機に直面していました。空襲により校舎の一部が被災した上、学生数も疎開により激減し、再建の目途が立ちませんでした。また、学園を支える経営陣の立場も動揺していました。1947（昭和22）年に、6・3・3制という新たな学制を定めた学校教育法の実施を控え、教育課程の抜本的改編を迫られていたにも拘わらず、公職追放を受ける者がいました。さらに、戦時中、学園経営を担った副館長・西河龍治も体力的な問題を抱えており、難局を乗り切るために優れた学園経営者を招聘することが必要だったのです。

そこで、東京女学館の復興を託されたのが、第8代館長・澤田源一でした。当時、東京女学館の経営陣は文部官僚出身者が多く、澤田もまた同様でした。優れた教育行政家でしたが、特に、設立間もない高松高等商業学校に校長として赴任し、全国有数の難関校に成長させ、内閣総理大臣・大平正芳などの優れた人材を輩出した実績がありました。その手腕に、期待がかけられたのです。

澤田もまた戦災で家をなくし、旧南館の一室に居住しながら、生徒の募集、教員の確保、校舎の改築に懸命の努力を払いました。生徒数を確保するため、小・中・高を中心に経営再建を図り、次第に学園を復興に導きます。しかし、その手法には大きな課題が残されていました。東京女学館は「高等科」という高等教育機関を有する、女子高等教育の草分け的存在でしたが、戦後の学制改革に対応できず、1948（昭和23）年に廃止していたのです。「高等科」を存続させるには、短期大学、ないし大学への改組が必要でしたが、校地・教員などの問題を解決する経済的余裕がなく、一旦、存続を断念したのです。

しかし、昭和20年代後半になると学園の経営も安定し、女子高等教育を復活させる機運が高まりました。そこで、1954（昭和29）年、高等学校の制度上で設置が認められていた専攻科を設置すると、それを短期大学設置への準備期間とし、わずか2年後の1956（昭和31）年、東京女学館短期大学を開校させました。ここに、東京女学館は独自の女子一貫教育を実現する学園として、ようやく復活を遂げたのです。

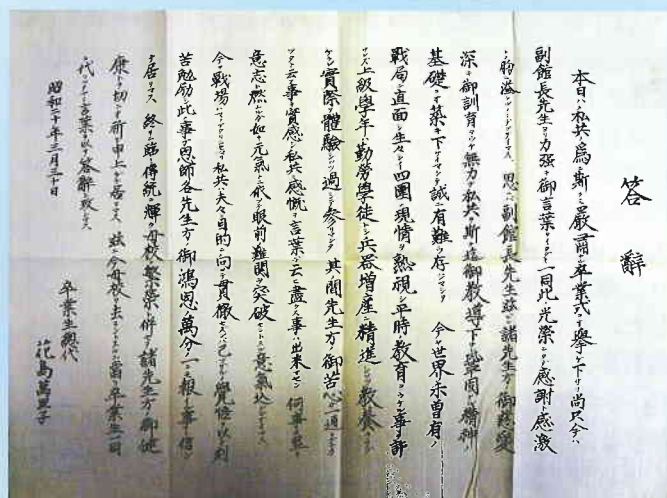
### 東京女学館と戦争

戦争は、東京女学館の教育に、あまりにも大きい影響をもたらしました。政府の方針により、上級の生徒は勤労学徒として各地の工場に動員され、兵器の増産などに当りました。そのため、特に1944～1945（昭和19～20）年頃になると、授業の実施は「勤労動員」の合間に行われる月一回の登校日のみとなり、当時の生徒は十分な教育を受けることができませんでした。また、空襲の激化も予想されたため、初等科の児童を中心に、それぞれの田舎の縁故を頼って疎開する「縁故疎開」が推奨されました。この結果、東京女学館の生徒数は著しく減少し、極めて難しい学園経営を強いられました。



このような混迷の時代に、東京女学館を支えていたのが、副館長・西河龍治でした。1940（昭和15）年、第7代館長・松浦鎮次郎が文部大臣になるため館長を辞した後、館長職は空席のままで、西河が実質的な館長の役割を担っていました。戦時中であり、新たな館長を迎えても教育の理想を実現できなかったためといわれています。西河は、ほぼ毎日学校内に宿直し、平和回復後の教育の再開を見据えて、学校施設の保全を図っていました。

### ◆1945（昭和20）年卒業生答辞（花島萬里子）



空襲により本館は被害を受け、第二体育館は焼失しました。しかし、被害をその程度に留めたことは、西河ら学校に宿直していた教職員の努力の賜物でした。1945（昭和20）年3月の卒業式で披露された「卒業生総代答辞」から、当時の生徒の心境と教職員の苦労を偲ぶことができます。



### 戦後復興への取り組み

戦後間もなく着任した澤田館長は、自らも戦災で家を失ったため旧南館の一室に居住し、東京女学館の教職員や生徒とまさしく一体となり、復興の歩みを進めました。生徒の募集、教員の確保、校舎の改築に懸命の努力を払い、戦前よりも大規模な学園体制を築いてゆきます。

しかし一方で、学園経営効率化のため、戦前の高等教育機関であった「高等科」を、1948（昭和23）年に一旦廃止しました。それゆえ、高等教育の復活を遂げてこそ本当の復興を遂げたといえるのであり、その復活が澤田の最大の課題のひとつでした。

◆第8代館長・澤田源一（1888～1975）



1888（明治21）年、京都の旅館・澤文の三男として生まれました。第三高等学校（現、京都大学）、東京帝国大学法科大学と進み、1912（明治45）年に内務省に入り、地方行政に携わります。1919（大正8）年、人事当局の薦めに応じて文部省書記官に転じると、教育行政に手腕を発揮します。重職である文部大臣官房秘書課長を務めた後、設立間もない高松高等商業学校（現、香川大学）校長として赴任し、全国有数の難関校に育成しました。その後、浦和高等学校（現、埼玉大学）校長、東京美術学校（現、東京芸術大学）校長を歴任しました。

戦後、文部省の上司であった関屋龍吉の紹介により、東京女学館に招聘され、1946（昭和21）年に副館長、その翌年に第8代館長となりました。培われた教育行政手腕と人脈を遺憾なく発揮して、東京女学館の復興・発展に尽くし、以後、1975（昭和50）年に逝去するまで、およそ30年近くにわたり館長を務めました。

◆学生時代の澤田源一



左は中学入学時（13歳）、右は大学2年時（21歳）。

◆内務官僚・文部官僚時代の澤田源一



左は内務官僚時代の澤田源一（25歳）。右は文部大臣官房

秘書課長として作成した公文書。

（国立公文書館アジア歴史資料センター公開・国立公文書館所蔵資料 ref. A11113711300・6画像目より）

短期大学の設置

1954（昭和29）年、本学は高等学校のさらに上級課程に相当する「専攻科」を設置し、それを短期大学設置への準備期間としました。その間、これまでに蓄積した澤田館長の全ての人脈と知恵を駆使して、校地・教員募集などの問題解決に尽力しました。そして1956（昭和31）年、ついに「東京女学館短期大学」の開校に至ります。ここによりやく、東京女学館は本来の姿へと復活を遂げ、女子の完全一貫教育を実現することができたのです。

この時、女子の「高等教育進学率」は未だ4.9%に過ぎません。東京女学館だけでなく、女子教育の普及・発展にとっても、非常に意義のある開校であったと評価できます。現在、「東京女学館短期大学」はありませんが、短期大学から四年制の大学に改編される2003（平成15）年まで、「東京女学館短期大学」が本学の女子高等教育を担い続けたのです。

◆高等学校・短期大学・大学への進学率推移

和暦	高等学校への進学率 (進級総数(合格)への進学率(%) 計 男 女			大学(学部)・短期大学 (本科)への進学率 (進級再入学者を含む) 計 男 女			西暦	東京女学館の歩み
	計	男	女	計	男	女		
昭和24年	...	...	...	...	...	...	1949年	
23	...	...	...	...	...	...	48	「高等科」廃止
24	...	...	...	...	...	...	49	
25	42.5	49.0	36.7	...	...	...	50	「短期大学」制度開始
26	45.6	51.4	39.6	...	...	...	51	
27	47.6	52.9	42.1	...	...	...	52	
28	48.3	52.7	43.7	...	...	...	53	
29	50.9	55.1	46.5	10.1	15.3	4.6	54	「専攻科」設置
30	51.5	55.5	47.4	10.1	15.0	5.0	55	
31	51.3	55.0	47.6	9.8	14.7	4.9	56	「短期大学」設置(広尾)
32	51.4	54.3	48.4	11.2	16.8	5.4	57	
33	53.7	56.2	51.1	10.7	16.0	5.2	58	
34	55.4	57.5	53.2	10.1	15.0	5.1	59	
35	57.7	59.6	55.9	10.3	14.9	5.5	60	
36	62.3	63.8	60.7	11.8	16.9	6.5	61	
37	64.0	65.5	62.5	12.8	18.1	7.4	62	
38	66.8	68.4	65.1	15.4	21.7	9.0	63	
39	69.3	70.6	67.9	19.9	27.9	11.6	64	
40	70.7	71.7	69.6	17.0	22.4	11.3	65	
41	72.3	73.5	71.2	16.1	20.2	11.8	66	
42	74.5	75.3	73.7	17.9	22.2	13.4	67	
43	76.8	77.0	76.5	19.2	23.8	14.4	68	
44	79.4	79.2	79.5	21.4	26.0	16.1	69	
45	82.1	81.6	82.7	23.8	29.2	17.7	70	
46	85.0	84.1	85.9	25.8	32.5	20.8	71	
47	87.2	86.2	88.2	29.8	36.7	23.7	72	
48	89.4	88.3	90.6	32.7	38.0	27.0	73	
49	90.8	89.7	91.9	35.2	40.5	29.8	74	
50	91.9	91.0	93.0	38.4	43.6	32.9	75	
51	92.6	91.7	93.5	38.5	43.3	33.6	76	
52	93.1	92.2	94.0	37.7	41.9	33.3	77	
53	93.5	92.7	94.4	38.4	43.1	33.5	78	「短期大学」町田移転
54	94.0	93.0	95.0	37.4	41.5	33.1	79	
55	94.2	93.1	95.4	37.4	41.3	33.3	80	
56	94.3	93.2	95.4	36.9	40.5	33.0	81	
57	94.3	93.2	95.5	36.3	39.8	32.7	82	
58	94.0	92.8	95.2	35.1	37.9	32.2	83	
59	93.9	92.5	95.0	35.6	38.3	32.8	84	
60	93.8	92.8	94.9	37.6	40.6	34.5	85	
61	93.8	92.8	94.9	34.7	35.9	33.5	86	
62	93.9	92.8	95.0	36.1	37.1	36.1	87	
63	94.1	92.9	95.3	36.7	37.2	36.2	88	
平成元年	94.1	93.0	95.3	36.3	35.8	36.8	89	
1	94.4	93.2	95.6	36.3	35.2	37.4	90	
2	94.6	93.5	95.8	37.7	36.3	38.2	91	
3	95.0	93.9	96.2	38.9	37.0	40.8	92	
4	95.3	94.2	96.5	40.9	38.5	43.4	93	
5	95.7	94.6	96.8	43.3	40.9	45.9	94	
6	95.8	94.7	97.0	45.2	42.9	47.6	95	
7	95.9	94.8	97.1	46.2	44.2	48.3	96	
8	95.9	94.8	97.0	47.3	45.8	48.9	97	
9	95.9	94.8	97.0	48.2	47.1	49.4	98	
10	95.8	94.8	96.9	49.1	48.6	49.6	99	
11	95.9	95.0	96.8	49.1	49.4	48.7	2000	
12	95.8	95.0	96.7	48.6	48.7	48.5	01	
13	95.8	95.2	96.5	48.6	48.8	48.5	02	「大学」設置 「短期大学」廃止
14	96.1	95.7	96.6	49.0	49.6	48.3	03	
15	96.3	96.0	96.7	49.9	51.1	48.7	04	
16	96.5	96.1	96.8	51.5	53.1	49.8	05	
17	96.5	96.2	96.8	52.3	53.7	51.0	06	
18	96.4	96.1	96.6	53.7	54.9	52.5	07	
19	96.4	96.2	96.6	55.3	56.5	54.1	08	
20	96.3	96.2	96.5	56.2	57.2	55.3	09	
21	96.3	96.1	96.5	55.8	57.7	56.0	10	
22	96.3	96.1	96.5	56.7	57.2	56.0	11	
23	96.4	96.2	96.7	56.7	57.2	56.7	11	

政府統計の総合窓口(e-Stat)「進学率(昭和28年～)」より作成。(単位:%)

## 校地問題の解決

短期大学は、限られた予算で校地の基準を満たすため、土地を借用してまかないました。例えば、三井不動産の浜田山運動場は、無料で借用する契約を交わした結果、借りられた所です。また、1955（昭和30）年には専攻科・短期大学の校舎としてK館を建設しました。

### ◆東京女学館全景。右側の校舎がK館。



### ◆短期大学を設置できなかった理由

私は役員の本席を汚す一員として澤田館長の堅実な経営方針が隅々まで行き届いていることにはいつも敬服しておりました。ただあるとき私は澤田先生に向けて「お粗末な短大が両後の筈の如く乱立しているご時勢ですが、歴史に輝く東京女学館は名門校にふさわしい短大をつくられては如何ですか」とおすすめたことがありました。そのとき先生は「残念ながら土地がないからね」と答えられました。

先生ご在世中にあの狭隘な土地を活用されて校舎の拡張を実現されたことは明かに大きな功績として、職員も父兄もひとしく認めておられることでしょうが、欲を申せば土地を他処に求めて学園の拡張を計ることが願わしかったのですが、ご存命中そこまで至らずに終わったことは残念の極みであります。

（水野敏雄「澤田先生の思い出」

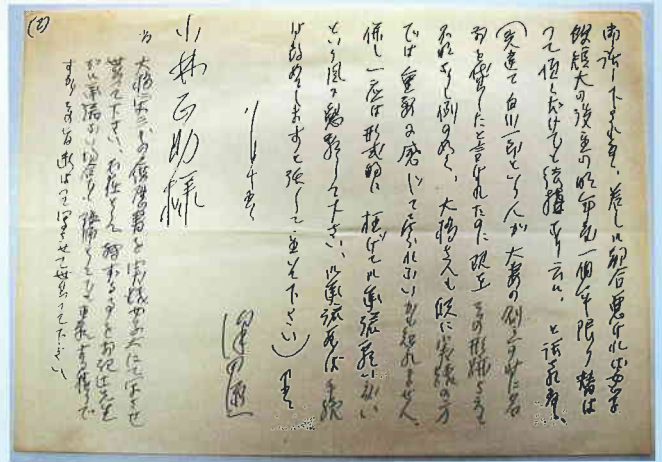
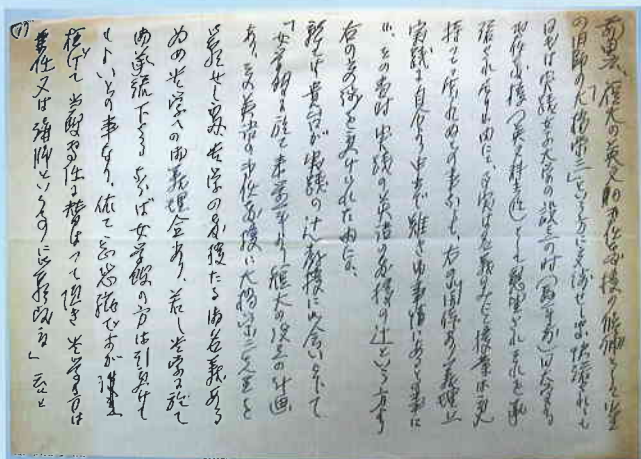
『追悼』東京女学館、1975年所収、38頁）

## 専任教員の確保

短期大学は、澤田館長の人脈を中心として、専任教員が集められました。しかし、既に他の大学で専任教員となっている人物が多く、交渉は容易に運びませんでした。

史料編纂室には、交渉の内幕を伝える、澤田と小林正助（東京女学館高校教諭）の往復書簡が残っています。

### ◆「(1950年)8月15日付小林正助宛澤田源一書簡」



前略、短大の英文専任教授の候補として小生の旧師の「大橋栄三」という方に交渉せし処、快諾されしも因氏は実践女子大学の設立の時（数年前）因大学より専任教授（英文科主任）として懸望されそれを承諾され居り候由にて、事實は名義のみにて授業は受持って居られぬとの事なるも――（中略）――若し御都合悪ければ女学館短大の設置の明年度一個年限り替はって頂くだけでも結構なり――（後略）――。

## 東京女学館における学園体制の模索

――宮地・有光・村山館長下の広尾・町田キャンパス  
(2012年11月～現在)

### ◆左上：【小・中・高等学校】広尾（羽沢）キャンパス



### ◆右下：【短期大学】町田キャンパス正門

## 総合解説

戦後の東京女学館には、二つの大きな改革期がありました。第一に、学園の戦後復興を成し遂げ、小学校から短期大学まで一貫する学園体制を整えた澤田源一館長の時代。第二に、従来の教育方針を刷新して、国際教育・リーダーシップ教育を提唱し、短期大学を四年制大学に発展させた沢沢雅英館長の時代です。しかし、この大改革・大成長期の狭間に、学園を安定的な成長へと導いた関係者の努力もまた、忘れてはなりません。宮地治邦・有光次郎・村山松雄館長（代行を

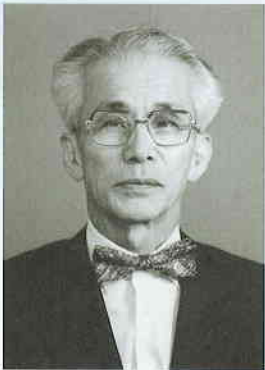
含む)の時代です。

澤田前館長より後継指名を受けた宮地館長は、社会科教員の出身で、経営者兼教育者の立場にあり、学者でもありませんでした。就任後、創立百周年に向けた記念事業を開始し、短期大学用地として町田キャンパスを新設しました。その後任である有光館長・村山館長(代行)は、共に文部事務次官まで務めた文部省の重鎮でした。行政官出身である彼らは、経営者である館長が、教育者である小・中・高・短期大学の各学校長を兼任する従来の体制を改め、学園体制を分頭化し、自身はあくまで経営者として館長職を務めました。その結果、学園体制の再考を促す議論が、学内から巻き起こります。高度情報化社会に対応する教育制度への改革を試みた、短期大学長・西田亀久夫の取り組みです。

こうした学園体制の模索の時代を、当時の人物と共に振り返ります。館長や各学校長の個性により、東京女学館の雰囲気に変化するさまを、歴史資料や写真の展示により表現しました。

## 学者館長・宮地治邦

### ◆第9代館長・宮地治邦(1915～2008)



1915(大正4)年、東京に生まれました。府立六中(現、新宿高校)・旧制高知高校(現、高知大学)を経て東京帝国大学に進み、1940(昭和15)年3月、文学部国史学科を卒業しました。そして同年4月、東京帝国大学史料編纂所嘱託になり、次いで鹿児島海軍航空隊教授に着任、その地で終戦を迎えました。

宮地の父は、東京帝国大学教授・宮地直一です。神道学の大家である父に倣い、自らもまた神道学の研究を志したのです。戦後間もなく國學院大学講師となり、神社本庁でも主事や参事として活動しました。1956(昭和31)年3月、東京女学館講師となりますが、あくまで軸足は國學院での研究生活にあり、1957(昭和32)年、國學院大学日本文化研究所へ入りました。

1959(昭和34)年10月には東京女学館短期大学教授となり、東京女学館に学者として迎えられました。その後、1962(昭和37)年3月に文学博士号を取得すると、同年6月、東京女学館教務課長(教頭)となり、澤田館長を支えました。

1959(昭和34)年10月には東京女学館短期大学教授となり、東京女学館に学者として迎えられました。その後、1962(昭和37)年3月に文学博士号を取得すると、同年6月、東京女学館教務課長(教頭)となり、澤田館長を支えました。

宮地の館長就任は、澤田館長の後継指名によります。澤田館長の発病に伴い、1974(昭和49)年1月、東京女学館短期大学副学長・同高等学校副校長・同中学校副校長・同小学校副校長、同副理事長となりました。澤田館長の逝去後、1975(昭和50)年2月8日、館長及び各学校長兼務となり、学園経営を担ったのです。

就任後、1988(昭和63)年11月の創立百周年に向けた記念事業を開始し、教育内容の充実と環境整備に尽しました。しかし、創立百周年を目前に控えた1987(昭和62)年に退職し、2008(平成20)年に逝去しました。

## 「宮地構想」の表明

1976(昭和51)年9月、宮地館長は学園誌『菊』の巻頭で、5ヶ条の「宮地構想」を発表しました。小・中・高・短期大学の教育内容充実、教育環境改善と共に掲げたのが、創立百周年記念を見据えた修史事業でした。

東京女学館の特色である「品性と教養」は、戦前より培われてきた校風に由来します。その学風を良き伝統として伝えてゆく為には、修史事業が必要であるという、学者館長ならではの発想がありました。

この構想に基づき百年史編集室が設けられ、『東京女学館史料』(1978年創刊)、『東京女学館百年小史』(1988年)、『東京女学館百年史』(1991年)が編纂されました。現在の史料編纂室の前身にあたります。

### ◆百年史編集室(1986年撮影)と『東京女学館百年史』



左から、元木光雄・大石文子・山岸章子の諸氏

## 短期大学の町田移転

1978(昭和53)年は、「宮地構想」の一つの画期といえる年でした。広尾キャンパスに小・中・高と併設されていた短期大学は、文部省の勧告を契機として、町田キャンパスに移転、独立を果たします。また、短期大学教員の研究誌である『東京女学館短期大学紀要』が創刊され、短期大学の教育・研究体制が充実しました。

小学校では、創立五十周年にあたり、百年史編纂事業に先駆けて『東京女学館小学校五十年史』が刊行されました。宮地館長のもと、東京女学館は新たな時代を迎えようとしていたのです。



### ◆竣工後間もない町田キャンパスの風景



## 学園体制の分頭化

学校法人の最高意思決定者は理事長であり、東京女学館ではそれを「館長」と称しています。館長の下に、小学校・中学校・高等学校・短期大学の各学校長・学長・がおり、それ

それぞれの教職員団を取りまとめています。

第8代館長・澤田源一は、東京女学館に新たな学園体制をもたらしました。館長でありながら、小・中・高・短大の各学校長（学長）を兼ね、学園の一体性を保つ方法を選んだのです。第9代館長・宮地治邦もその遺志を継ぎ、澤田館長と同様の兼務体制を選びました。

しかし、短期大学の町田キャンパス移転は、従来の学園体制に再考を促しました。館長は経営者ですが、学校長・学長は教育者です。広尾と町田の両キャンパスが出来たことで、教育者としての学校長・学長が常駐できなくなりました。そこで、学園経営が分頭化され、第10代館長・有光次郎、第11代館長（代行）村山松雄の時代は、館長の下に各学校長が配されました。有光・村山とも教育行政官であり、教育者ではなかったこともあります。

#### ◆第10代館長・有光次郎（1903～1995）



1903（明治36）年、高知に生まれました。東京帝国大学法学部を卒業し、1927（昭和2）年、文部省に入省後、次第に頭角を現し、澤田館長と同じ大臣官房秘書課長を務め、大臣秘書官を兼務しました。その後、科学局長、体育局長、教科書局長などの要職を歴任し、1947（昭和22）年に文部事務次官になりました。

教育基本法制定や6・3・3制導入など、戦後の教育制度大改革の旗振り役として活躍し、戦後史にその名を刻みました。退官後は日本芸術院長等の社会活動に精力的に取り組み、その傍ら、本学の館長に就任しました。

国技館で行われた創立百周年記念式典は、宮地館長により準備され、有光館長のもと行われました。



#### ◆第11代館長（代行）・村山松雄（1921～2001）



大学学術局長などを務めた高等教育の専門家、文部事務次官としては1971～1974（昭和46～49）年の約3年間に及ぶ、長期在任者でした。

日本育英会理事長や東京国立博物館館長などを務めたのち、平成2（1990）年、第11代館長（代行）に就任しました。しかし、あくまで館長代行としての立場に終始し、

次の館長・渋沢雅英へとその任を引き継ぎました。

#### ◆新任学校長・学長の顔触れ



左より、石手俊夫（小学校長）、四竈経夫（中学・高等学校長）、辻本芳郎（短期大学長）

### 西田学長の改革

西田亀久夫が短期大学長に就任すると、東京女学館に新風を吹き込みました。西田は、大学紛争の最盛期に学生問題を担当した辣腕の文部官僚であり、その頃から、高等教育について抱き続けていた理想がありました。

西田は1960年代から高度情報化社会の到来を予測しており、その対応が必要だと考えていました。そこで、従来の「文科」を「国際文化学科」「情報社会学科」の二系統に再編成し、時代の要請に応えようとしたのです。事実、「情報社会学科」は人気学科となりました。

また、Z値という変数を利用した入試改革にも取り組み、理系の発想からより効果的な選抜方法へ大改革を試みました。しかし、これにより、女子の大学志向の風潮と相俟って、本学からの内部進学者が激減し、短大における東京女学館の良き校風が若干後退した点も、否めませんでした。

#### ◆西田亀久夫（1916～2007）



東京帝国大学理学部物理学を卒業した理学士で、戦後間もなく大阪学芸大学の助教授になった学者でした。しかし、文部事務次官・日高第四郎に請われて文部省に入ると、学生問題の担当となり、60年安保闘争の前後約10年間、学生運動の最盛期に文部省の第一線で活躍し続けました。その後、文部省大臣官房審議官や日本ユネスコ国内委員会事務総長などを務めた後、木更津高等専門学校長などを経て、1988（昭和63）年、東京女学館短期大学長に就任しました。

#### ◆『未来の大学』（誠文堂新光社、1970年）

西田が文部省大臣官房審議官時代、衛藤藩吉・公文俊平・



香山健一らの時代を代表する学者・政党人と未来の大学像について討議した、国際シンポジウムをまとめた本。

その後、西田と共同編者であった永井道雄と大来佐武郎は、それぞれ文部大臣、外務大臣になることから、西田という人物の背景を窺い知ることができます。